

SEMINAR HOUSE NEWS

セミナー・ハウス'92夏

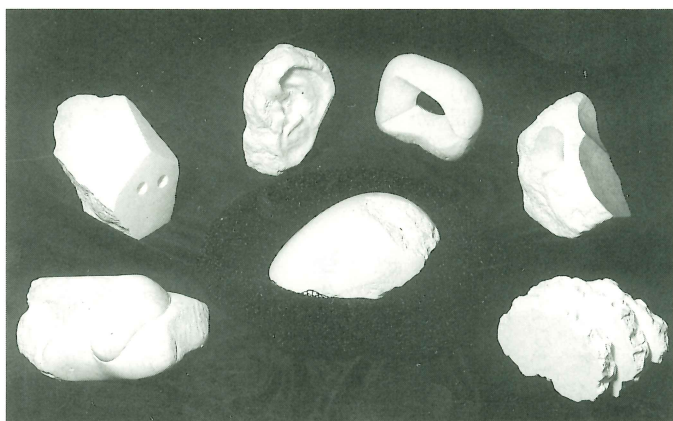
●研究者であり教育者であるために

＝第3回大学教員研修プログラム＝

●よりよい大学教育の方法を求めて ——研究者vs.教育者——

●法人ニュース

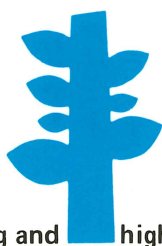
●平成3年度 教育プログラム白書／業務白書



掲げた研修旗のもと、
「自己把握と表現」の心理学にもふれ、
再発見・再確認した自己の造型表現に挑戦！



所員研修の一コマ——東芝デザインセンター



研究者であり 教育者であるために

東京大学総長 有馬 朗人

「教える」ことへの気付き

私が「教育」に関心を持ったのはアメリカ滞在中のことです。シカゴに研究者として渡ったのは一九五九年、私が二九歳のことでしたが、その時、授業が実によく準備してあることに感心したのがきっかけです。OHPもなく、使うのは黒板とスライドだけでしたが、そこにはポイントなどが全部書いてあり、充分な準備をした講義やセミナーを、一時間ならピシャッと一時間で止める、というやり方がとられていました。それ以来、「時間を守る」「何を話したいか書いて行く」を身に着けました。でも、一九六一年に帰国して、東京大学で専門の原子核物理学などの講義を講師として始めた時、シラバスは書いても短いものでした。しかし、一所懸命にはやったつもりで、講義のノートはきちんと書き、二年使えば、あとは他の講義、あるいは専門の中でも少し違う分野の講義をするというようにしてきました。東京大学の物理教室の方針では、同じ人が一年以上同じ講義はしないという鉄則があります。

講義のやり方に私が真剣になったのは、一九六七年から六八年にプリンストン大学とニューヨーク州立大学のラトガーズ大学の客員教授として講義をするようになってからでした。また、一九六九年から七三年の間ニューヨーク州立大学のストーニブルック校の教授として着任してからは、本気になって「教育」というものはこうすべき」という信念を持つに至りました。そしてシラバスをきちんと書くだけでなく、長くて一時間の講義を週二

②

回、短くて四五分の講義を週三回行ないました。その時の一クラスの人数は三〇人位で、三人の教授が並行に同じ内容の講義をする。この三人の担当教授がまず集まって教科書を決めるところから始まります。アメリカの教育方法が一〇〇%良いかには疑問もあります。が、一つのやり方として話します。つまり、教科書会社から送ってもらった沢山の教科書のなかから良い教科書を選ぶのです。最近私は「関数論」についての教科書を書きました。が、「総長をやっている、よくそんな暇があるなあ」と言われた。これが日本の評価ですが、アメリカではファイマンというノーベル賞受賞者が実に長い時間をかけて物理学の教え方を根本から変えるような立派な教科書を書いている。でもファイマン学派はそれを金科玉条として使うけれども、一方、これはドラムを叩いている物理学者の書いた本だから駄目という人もいるように、様々な評価があります。しかし、こうして選んだ上で三人の教授が並行して教えるから、自ずと教え方の上手な先生と下手な先生が出てくることになりました。

学生評価との出会い

私も講義をする時は泣きの涙、特にニューヨーク周辺出身の子供達の多い学部在学生は、ニューヨーク語でなければ通じません。ですから、単語という単語のアクセントを辞書で調べることまでしました。しかも、私の専門は原子核・量子力学・群論なのに、専門でない熱力学を教えるという。熱力学や統計力学が嫌いだから原子核物理学を専攻したの

にもかかわらずです。それで物理を一所懸命勉強し直し、英語も発音から全部おさらいしました。つまりこの二年間、学生に教育するだけでなく、私自身も教育を受けたわけです。「黒板のどの辺まで見えるか」「声はどこまで通るか」といったことも最初にチェックするのは、日本の大学の教室の作り方は、教室の黒板の置き方、音の聞こえ方にあまり注意をしていない。準備以上に教室をよくすることを考える必要もここで体験しました。

無事に学期が終ると、チェアマン（主任教授・学科長）が、「この袋を持って行きなさい。これはスチューデント・アセスメント（学生評価）というものである」とゴッソリ袋をくれる。中を見ると、「この先生は、ちゃんと時間通り来ましたか」「時間通り止めたかか」「準備がしてありましたか」「講義はちゃんと分かりましたか」「質問に答えましたか」「不明確でしたか」など細かく、しかも五段階になっている。これを生徒に配ってその学期の講義が終る。数日たつとチェアマンが笑いながら、「お前は点数の付け方の甘い奴だ。学生評価が良かったから、試験は易しかったのではないか」「いや、まだ試験していない」「ああそうか」ということで、翌年の給料に多少影響がでます。もともと私の場合、それで給料が上がったというのではなく、講演、国際会議などを頼まれたり、論文をいくつか書いた等で評価されて上がったのですが、学生の評価が非常に悪かったらどうなっていましたか。でも、ノーベル賞をもらった私の友人の評価は非常に悪かったのだから学生評価は心配するものではないので、私は



この種の評価を怖がる日本の教官には、「ちつとも怖いものではなくて、むしろ楽しみだ」と言いたい。自分が思いがけないところが点数がよく、思わぬところが悪いという、自分の感覚と違う答えが返ってくるのが役に立つし、講義の仕方など、いろいろな気付けられるからです。学生の質問にその場で答えられないのも、あいつは本当は分かっているから後で答えるとされてしまい、「質問に答えませんでした」という評価が付くことになるのです。

TAの効用

アメリカの講義、校風で良かったことの一つは、ティーチング・アシスタント(TA)が必ず付いていることです。私の場合は、三〇四〇人の学生を一人のTAが受け持ち、毎講義が終ると、教科書のページの何番から何番までという形で宿題にし、TAがその答えを全部採点してくれ、それを毎週私にレポートする。「この男はよくできる、この男はできない、あるいは、お前の講義は悪かったから、この週のこの講義の問題は非常にできが悪い。だからもう一回やり直せ」という具合です。私は日本でもこのTAの導入を長らく働きかけて、やっと実現することになり、うれしく思っています。でもこれには随分反対もありました。大学院自治会、学部の中央委員会、職員組合などは、総長交渉のために、「TA排撃運動」を起こしました。「助手の職を奪う」ということが運動の理由だったようですが、そんなことはありません。むしろ助手は、細かい学生指導から離れてもっと深い研究、教育ができるようになり、その上TAは

大学院の学生の教育にもなるのです。TAは採点しなくてはならず、必然的にその科目の勉強をしますし、また、TAがあることによって学部の学生は自分がどこがわかり、またわからないかが非常によくわかるのです。また、TAの体験で学生に対して、どのように理解させるかの経験を積むことは重要なことだと思います。こんな意味で私はTAの推進論者です。ごく最近、東大の理学部でTAを導入したのですが、その結果、詳細なTA自身からの評価があり、またそれを使った教官からは、積極的な支持を得たと思います。

教師としての工夫

ところで、日本の方が良いと感じたことも話しておきますと、それは大学院生とのコミュニケーションに関してです。日本では、大学院の学生諸君と三五年間毎日昼飯を一緒に食べていました。アメリカでは教授の行くレストランは立派なのですが、学生が行くのは安いカフェテリアだからこれができない。だから、ノーベル賞をもらったような人達や友達と何人かで昼飯を食べに行き、そこで学問以外にもいろいろ話のできる良さはあるのです。けれども、学生諸君と毎日昼飯を一緒に食べるようなことはできない。うちでパーティをやって学生をよぶということはありませんけれど。ここからくる影響という意味では日本のやり方に軍配をあげます。

こんな体験から、私は日本での講義でも、一コマの授業に最低一日は使って準備をし、初めてやる講義は準備のために三日使いました。最初の日はノートを書き、次の日はノ

トを見ながら、講義の際黒板に書くだろうことを全部紙に書き出す。そして三日目はノートを伏せて全く見ないで覚えているかどうか、もう一度ノートに書いて確認する。ですから私は日本に帰ってからの講義では、三時間の講義でもノートを見たことはなかったように思います。でもこれは東京大学の、しかも物理教室だから、大学院か学部の講義を年に一コマ講義すればいいからできたので、毎週三コマも講義するとなれば、こんなやり方では朝から晩まで準備に費やされてしまうでしょう。でも、このため私の講義は、時に教えずぎになっただけでなく、早口で、しかも大きな黒板の左の隅から右までずらっと板書を書いて、ぱっと消すような状態でした。ですから、学生には気の毒だったかも知れませんが、私は講義終了後の三〇分ほどは、学生の相手をして疑問に答えました。しかし、この講義の失敗には、その時には気付かなかったのですが、最近になって、「先生の講義は早すぎた」の評が耳に入ります。でも一〇年後では間に合いませんから、この学生評価はぜひ、日本でもやるべきだと思います。それで給料を上げたり下げたりするためではなくて、講義が学生にとって分かりやすいかどうか、もつと工夫はないかを考える根拠にすることだけで意味があると思うのです。

講義のアフターケア

私の失敗談として、この学生評価に関係することを付け加えようと思います。それは私自身の講義に対して、アフターケアが不足したことです。つまり試験をやってみて初めて、

学生に対して、十分理解させるだけの講義をしていなかったということがわかったことです。もしTAがいて、きちんと学生諸君をチェックしていれば、わかる、わからないの程度が理解できたはずです。ですから、私は自分自身の講義のやりっ放しに対し、大いに反省をしています。

それから更に、忙しかったというのは表向き、本当は無精で採点が嫌なものですから、ギリギリ卒業まで採点をしないことが多かったのも反省の一つです。だから卒業の直前になって、「あんなにあれが分からなかったのかなあ」と愕然とするが、ここで落第させるわけにはいかない……となる、これはきわめて無責任であったと思います。講義の準備は、きわめて優等生であったと自分なりに思います。しかし、準備を重ねる一方で、スピードが早すぎ、アフターケアをしなかったことにおいて、私は自分の講義に非常に辛い点を付けています。これまで私は自分の経験を、多少自慢話めいて申し上げたような気もしますが、実は深い自己反省の命題の出発点でもあるのです。

日本の大学の講義の一般的なやり方に対して、私はもう少し評価をすべきだとも思います。いつも問題になる「教育VS.研究」ということについてです。私自身、学生諸君の試験の採点を引き延ばし、学生の理解度についても関心を持つことが少なかったと思います。それは、研究熱心の余り、採点するだけの時間があれ

ば一つでも計算をし、一つでも論文を書きたい思いがあったからでしょう。そのため、講義の後始末をおろそかにしたことに例示されますように、配慮が足りませんでした。「研究と教育」のあり方は、やはり大学の車の両輪というものの、極めて難しい問題だと私は思っています。

教育体系の再編成も

私は東京大学で、一般教育、教養過程というのは極めて重要であるという考え方を取っています。大学審議会の考え方に合うのか反対かわかりませんが、私は東京大学の教養学部を充実する政策を採っています。ですから教養学部では、教養一般を教え、かつ、専門を教える、大学院もやるという、三位一体のやり方で現在、教養学部を強化する政策を採っています。

講座を増やし、教室を増やすという形で教養学部を強化する方針を採り、教養学部の教官を専門学部に吸収することはいたしません。数学を例にいたしますと、専門学部の数学を切り放して教養学部の数学と一緒にさせ、数理科学研究科を作りました。その数理科学研究科の人々が一般教育の数学も、専門学部も、大学院も、全部受け持つという形にしました。ただ、その方が研究至上主義的な考えになりはしないかとの懸念はもっています。研究を母体にして教育体系を再編成することに限りはしないか、教育をより

一層評価するにはどうしたらいいかが、私の最近の課題です。

つまり、教養学部を再編成し、一般教育だけでなく、出来るだけ全部を講座制にして専門教育を行ない、さらにその上に大学院を置くわけです。そういたしますと、一般教育をする人々もまた専門教育、大学院教育そして研究という、研究中心主義になりはしないかという懸念があまりです。それを防ぐために、教育にもう少し充分な陽を当てるべきではないかということでは。

研究者であり教育者であるために

私自身これまで研究中心主義者でしたので、教育にも随分時間は費やしましたけれども、心は研究にありましたから、その意味で研究と教育の車の両輪は難しい問題だと感じていました。しかし良い研究者なら、教育の上でも何もかも雰囲気が生み出されてくることも事実です。非常に良い研究者で、必ずしも講義の仕方は巧くはないが若手を惹き付ける人がいるからです。教育は技術ではない、これを技術だと思ってしまうことは間違いだと思います。何ものかを学んでいる研究者という自身が一方にあり、それに情熱を持ちながら教育をするということが大学のレベルでは大切ではないかということとです。

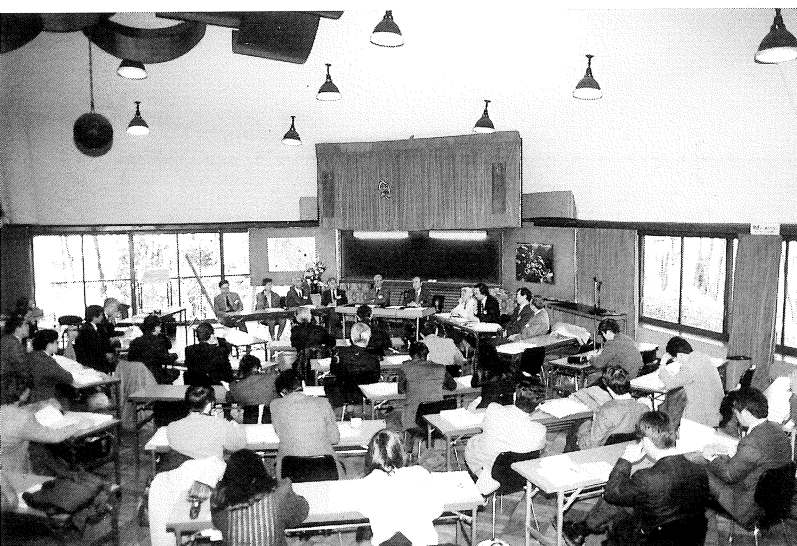
新制大学が創られた時の歴史から、一般教育に向けられる人々は教育者に専念せよ、専門に行く人は一義的には研究者

で、余力で講義をするという仕組みは一応定着しているようにも思われます。かつてはこれはきっぱり分かれ、旧制高等学校ではほとんどの人が教育に専念していました。中には研究者としても優れ、やがて大学に戻って大学者となった人々もいました。しかし、旧制高等学校の第一の目的は教育であり、教育者として非常に優れた人々が出たわけです。

一方、非常に数は少なかったけれども大学の教員は専門家・研究者であり、余力で教育をしていくという時代でした。最近では、教育と研究のあり方について、「ある年齢以上の人は、研究者としてエネルギーが消えているから一般教育をなささい」とおっしゃる方もありますが、その発言には私は大反対です。もし研究者としてエネルギーが消えているなら良い教育はできませんし、研究者として情熱をもった教育が大切だと思うからです。しかし一方で私は、教育そのものに情熱をかける人が生まれても良い時代ではないかと思っています。

いろいろと思いつくままに私の体験、私の思うことをお話ししましたが、結局のところ、私は、このFDプログラムの活動の反面教師としての役割を演じたのではないかとも思います。そんな意味での何かのご参考になれば幸いです。

(文責・編集者)



大学教員研修プログラム——大学教員の存在意味を考える

第3回大学教員研修プログラム

よりよい大学教育の方法を求めて

——研究者vs.教育者——

期日 1992年1月18日～19日

▼参加者54名(31校)

(講師・運営委員を含む)

早稲田(6)、中央(5)、電気通信・東京女子・東京理科(各3)、お茶の水女子・日本・武蔵工業・国際基督教・東洋英和女学院(各2)、北海道・筑波・千葉・東京・横浜国立・埼玉・神戸・明治・法政・立教・成蹊・上智・武蔵・東京経済・工学院・芝浦工業・亜細亜・文

教・和洋女子・都立立川短期・日本大学短期(各1)、その他(3)

◇

今回は大学教員懇談会の枠から完全に独立し、プログラムの名称も「大学教員研修プログラム」と改めて開催された。このプログラムは「新任教員研修プログラム開発のための共同プロジェクト」として文部省の教育方法等改善経費の助成

を受けながら、国公私立大学から選ばれたFDプログラム小委員会を中心に研修の企画が立てられ、運営されている。

研修の日程は、左表の通りである。紙面の都合で、研修の模様を詳細に伝えることができないが、講演要旨を次頁に掲載したのでご覧いただきたい。

研修では『FDハンドブック』をテキストに、発題や講演を中心に共通する話題を取り上げる全体会と、個別具体的な問題や悩みなどについて相互に経験を披露し合う分科会で構成された。なおこのプログラムでは、専門の指導員がいるわけではなく、参加者と同様に現場で日々工夫し、あるいは悩んでいる教員が講演

や問題提起をし、あるいはまた分科会のファシリテーターとなって研修をリードした。

多忙のなか特別講演をお引き受け下さった有馬朗人氏、別表のようなテーマでお話し下さった藤原正彦氏、ロニー・アレキサンダー氏、それからFDプログラム小委員会として話題を提供して下さいました示村悦二郎氏、蠟山道雄氏、福田一郎氏、原一雄氏、そしてこの研修の運営委員として、また分科会のファシリテーターとしてご協力下さった中島利誠氏、中田良平氏、坂井昭宏氏、原科幸彦氏に対して改めて感謝の意を表したい。

■プログラム■

■第1日 1月18日(土)

- 12:00 受付開始
 13:15~13:45 開会
 13:45~14:45 セッションI (講演)
 設置基準と大学教育の枠組
 早稲田大学理工学部教授 示村悦二郎
 14:45~15:15 ティー・タイム
 15:15~18:15 セッションII (パネルI)
 1. よりよい授業を行なうために
 上智大学外国語学部教授 蠟山道雄
 2. 授業をどのように計画し実施するか
 東京女子大学文理学部教授 福田一郎
 3. 試験で何を測定し、どう評価するか
 国際基督教大学教養学部教授 原一雄
 18:15~18:30 オリエンテーション
 18:30~19:30 夕食
 19:30~20:30 セッションIII (特別講演)
 東京大学総長 有馬朗人
 20:45~22:20 セッションIV (分科会)
 【ファシリテーター】
 お茶の水女子大学家政学部教授 中島利誠
 電気通信大学電気通信学部教授 中田良平
 北海道大学文学部助教授 坂井昭宏
 22:30~23:30 懇親会

■第2日 1月19日(日)

- 8:00~9:00 朝食、チェック・アウト
 9:15~10:15 セッションV (パネルII)
 1. 比較文化論的授業比較
 お茶の水女子大学理学部教授 藤原正彦
 2. FDはなぜ必要か——日米比較——
 神戸大学法学部助教授
 ロニー・アレキサンダー
 10:30~12:00 セッションVI (全体討論)
 1. 分科会報告
 2. 総括討論
 12:00~12:30 閉会
 12:30~13:00 昼食会
 解散
 【運営委員】 お茶の水女子大学家政学部教授 中島利誠
 <委員長>
 東京女子大学文理学部教授 福田一郎
 電気通信大学電気通信学部教授 中田良平
 東京工業大学工学部助教授 原科幸彦
 北海道大学文学部助教授 坂井昭宏

⑤

第3回大学教員研修プログラム●講演要旨

設置基準と大学教育の枠組

早稲田大学理工学部教授 示村悦二郎

昨年七月一日に大学設置基準の一部が改正されたが、内容的には全面改正に近い大改正であった。この改正のねらいは、できる限り規定を大綱的なものにとどめて、各大学の自主的な努力によってより高度で特色のある大学教育を実現しようとするところにある。我々教員の教育方法の改善にとって重要と思われる部分を中心に考えてみたい。

カリキュラムと教育目標

我々教員にとって大切なカリキュラムの問題は、改正設置基準の第十九条に示されているように教育課程＝カリキュラムを体系的に、しかも当該大学あるいは学部・学科等の教育目標を達成するように編成すること、と明記された。このことはわが国の大学教育の歴史の中で画期的なことである。カリキュラムを作るに当たっては、まず自分の大学あるいは学部・学科等の目的や理念とは何かを確認しなくてはいけなくなった。

それでは、具体的にカリキュラムをどう考えていけばいいのか、またどういう問題がそこには含まれているのか。まずはカリキュラムとは、科目の配列プロセス履修規定であると考えている。つまり配列だけではカリキュラムとはいえない。だから科目を学年毎にどう配当す

るか、必修にするのか選択にするのか、自由科目にするのか、そしてそれをどういう順序で履修させたいのか、どの科目

と組み合わせることができのかなど、ひとつの考えを具体的に表現した履修規定が必要なのである。

さらに、そのカリキュラムの精神を実質化するためには学習指導が欠かせない。そのカリキュラムの中で私たち教員一人ひとりが自分の担当している科目について良い授業をすることがなによりも大事である。しかも教室あるいは学部などで直接カリキュラムに関わる教員同士の十分な合意の上で授業が進められなければならない。

実質的な学修量としての単位

次に、単位についても以前の設置基準と大きく変わっているので、理解しておく必要がある。設置基準の第二十一条には「各授業科目の単位数は大学において定めるものとする」、ただし「一単位の授業科目を四十五時間の学修を必要とする内容をもって構成する」と書かれている。旧設置基準のように教室外の学習時間を法規上書いても強制力は全くないので、もっと実質的な学修の量として定めることにしたのである。これまでのように教室外で自習しろと言ってそのまま放置できなくなった。例えば講義について言えば、「十五時間から三十時間までの範囲で大学が定める時間の授業をもって

一単位とする」という規定になっているので、一学期を十五週として週一時間の授業をすれば一単位、現在多くの大学で行なっているように週二時間の授業をすれば、一学期で二単位になるかといえば、そうではない。あくまでも自習をさせるだけの分量を計算して、しかも自習しなくてはならないようにしておいてトータルで四十五時間で一単位、あるいは九十分钟で二単位という内容をもって授業をしなくてはならない。

柔軟な学習形態

もう一つのポイントは、学習形態にフレキシビリティを持たせたということである。まず第一は、「大学以外の教育施設等における学修」を一定の条件のもとに認めた。どこの専門学校でもいいというわけではないが、専門学校で勉強した成果を大学での履修として認める。第二は、「入学前の既修得単位」を認めることになった。例えば、途中で退学した人がまた改めて大学に入学した場合に、これまでの制度だと以前に取得した単位は全部リセットされてしまったが、これからは一定の条件で認めることになった。第三に「科目等履修生」という規程ができた。これからは生涯学習体系に移行していくだろうということから、もっといろいろなキャリアの人が大学で勉強をするという可能性を作っておく必要がある。科目履修生に対する教育プログラムやカリキュラムを各大学で用意することが求められている。

自己評価・自己点検

さて、新しい設置基準の第二条には「大学はその教育研究水準の向上をはかり、当該大学の目的及び、社会的使命を達成するため、当該大学における教育・研究活動等の状況について自ら点検及び評価を行なうことに努めなければならない」という「自己評価」に関する条文が入った。罰則規定はないが、実際には「ねばならない」ものになっている。評価基準を誰が決めるのか、評価は誰がするのか、点検は誰がするのか、ということが大学にとっては大きな問題である。組織体によつてはこれを組織の中に作る必要はなく、外から行なっても良い場合がある。しかし卑しくも学問の独立、自主性を尊重している大学においては、安易にそれを第三者の手に売り渡すのは良くない、我々の手でやるべきであるという考えから「自己」評価、「自己」点検となっているのである。

従つて、自己点検・評価は大学の管理運営から個々の授業にいたる全ての営為にわたるものである。なかでも一人ひとりの教員にとつては、それぞれの立場でいかにより良い教育を行なうかという観点から不断の点検・評価、向上の努力が求められる。いづれにしても、今回の設置基準の改正によつて我々教員の側にボールが投げられているのである。この機会を活かして、いかにより良い大学教育を作り上げていけるか、大学人の成熟度が問われている。(文責・編集者)

●年間の宿泊利用者が六万人を超える
平成3年度の宿泊利用者数は延べ六万
一、一六二人(月平均五、〇九六人)、グ
ループ数は一、二二〇(同九三)であつ
た(表1)。本年度の目標五万五、五〇〇
人を五、五六二人上回り、対前年度比で
も五、五五一人(一〇%)の増となった。
開館以来の最多記録を二年連続更新した
が、年間の宿泊利用者が六万人を超えた

表1 利用者別宿泊人数・ゼミ回数

()内は前年度

利用者	人数・回数	グループ数	比率 (%)	宿泊延人数 (人)	比率 (%)	1団体平均人数
会員校	496 (535)		44.3	25,431(26,737)	41.6	51 (34)
非会員校	194 (189)		17.3	8,652(6,641)	14.2	45 (27)
大学連合	70 (56)		6.3	5,267(4,109)	8.6	75 (38)
学術・教育団体	147 (145)		13.1	9,996(9,019)	16.3	68 (37)
企業・社会人団体	213 (216)		19.0	11,816(9,105)	19.3	55 (25)
合計	1,120(1,141)		100	61,162(55,611)	100	55 (32)

図1 利用グループ別宿泊延人数

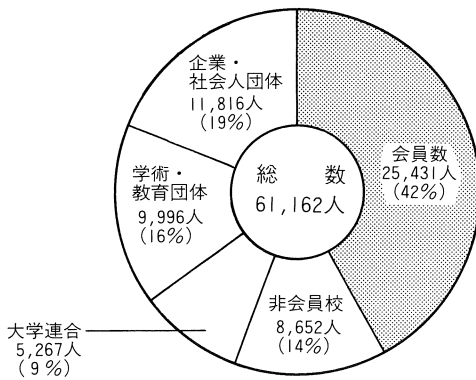
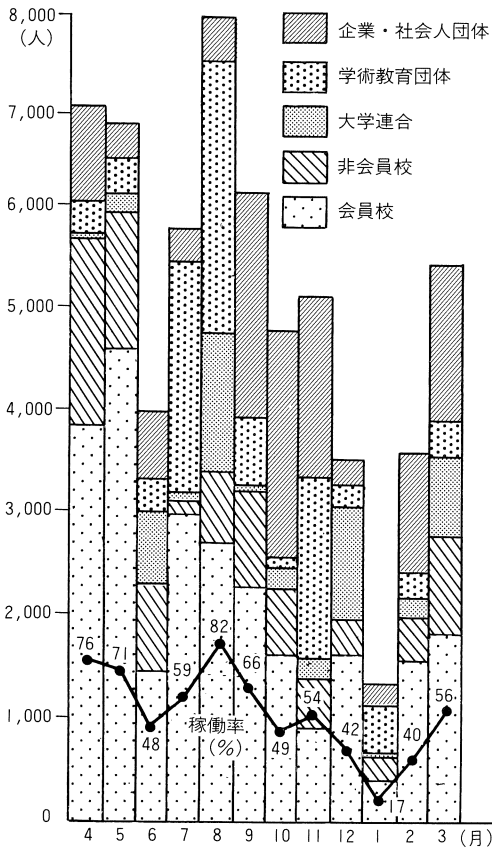


表2 協会員校最多利用10校

順位	大学名	グループ数	順位	大学名	宿泊延人数
1	中央大学	53	1	中央大学	3,254
2	早稲田大学	35	2	早稲田大学	1,533
3	東京都立大学	31	3	東京学芸大学	1,018
4	明治学院大学	28	4	東京薬科大学	997
5	東京学芸大学	27	5	明治学院大学	893
6	法政大学	19	6	東京都立大学	888
7	東京大学	18	7	学習院大学	805
8	東京理科大学	16	8	明星大学	737
8	駒沢大学	16	9	帝京大学	735
10	明治大学	15	10	立教大学	700

図2 月別・利用者別宿泊延人数と稼働率



のも初めてのことであった。
なお、開館から本年度末まで(26年9
カ月間)の宿泊利用者数は延べ二二万
八、七〇〇人、グループ数は二万六、〇五
四に達した。
●グループ別の利用状況
宿泊延人数全体に占めるグループ別の
構成比率を図1で示した。「会員校」(本
年度末現在計六六校)の利用は二万五、
四三一人で前年度と大差はないが、構成
比率では全体の四二% (前年度四八%)
であった。「大学連合」には当ハウス主
催の教育プログラムをはじめ会員校の教
師・学生が多数参加する諸集會が含まれ
ているので、「会員校」の利用率は実際
にはこれより高いのであるが、会員各校
のなお一層の有効利用が期待される。
なお、本年度最多利用の協会員校一
〇校を表2に示した。宿泊延人数の一、
二位は昭和61年度以来六年間、中央大学

と早稲田大学の両校が占めている。
「学術・教育団体」と「企業社会人」
は前年度に続き上昇し、構成比率でも双
方で計三六% (前年度三二%)を占めた。
「記念館」増設三年目の効果、生涯学習
の時代、都心の国立宿泊研修センター改
築工事に伴う同施設利用者の流入、など
が要因として挙げられる。
●年間の稼働率五五・七%
年間の稼働日数は、6月の施設整備期
間と年末年始の休館日を差し引いた三五
四日で、宿舍の平均稼働率は五五・七%
(前年度五〇・八%)であった。これは「記
念館」新設で収容定員が三一〇名に増員
して以来三年間の最高である。図2に月
別の利用状況と稼働率を示したが、平均
を上回る月は、例年同様、年度前半(春
から夏)に多く、下回る月は後半(秋か
ら冬)に多くなっている。

新専務理事に岡宏子氏就任
館長と兼任に

6月3日に開催された第79回理事会は法人執行部の人事を審議し、任期満了により退任する小岩健介専務理事の後任として岡宏子理事を選任。同氏は6月4日付で専務理事に就任し、これまでの館長職と兼任することとなった。

第79回理事会・第59回評議員会
'92年6月3日/学士会館(神田)

〔出席者〕

(理事) 中川秀恭、岡宏子、天城勲、佐野博敏、末松安晴、三宅彰、鈴木皇、宇野重昭、小岩健介

(監事) 阪上信次、高木友之助

(評議員) 伏見康治、山本肇、角田稔、堀川清司、梶原長雄、黒田瑛、古浜庄一(代理・伊藤泰郎)、福井守(代理・千葉吉明)、大野一男(代理・本田創造)

委任状による者11理事11名、評議員68名(敬称略・順不同)

中川理事長が議長となり議事が進められた。小岩専務理事から各議案について逐次提案説明があり、それぞれ質疑・審議の結果、いずれも可決承認された。

▽会員校の加入・脱退の件

専修大学の協会員校加入。文京女子短期大学の準協会員校脱退。専修大学

は10年ぶりの会員校復活となり、これで会員校は計68校となった。

▽役員人事に関する件

協力会員校の学長交替に伴う明治大学長岡野加穂留氏の理事就任と前学長木村礎氏の退任。理事長中川秀恭氏、常務理事八氏ら理事20名、監事2名の再任。

また、任期満了により退任となる小岩健介専務理事に代わり、ハウスの当面する諸問題に鑑み、理事で館長の岡宏子氏を後任に推挙したい旨の理事長提案があり、一同これを承認。同氏は6月4日付で専務理事と館長を兼任することになった。

▽評議員人事に関する件
協会員校加入に伴う、高千穂商科大学長福井守、桜美林大学長大野一男、専修大学長望月清司各氏の新任。学長交替に伴う東京経済大学長富塚文太郎、東京都立商科短期大学長二井房男両氏の新任と荒川幾男、宮脇清自両氏の退任。東京都立科学技術大学長渡辺茂氏の逝去に伴う退任。学識経験者二一名、会員校代表者五五名、財界関係者一六名の再任。

表4 平成4年度一般会計収支予算書
(平成4年4月1日~平成5年3月31日)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
基本財産運用収入	127,000	人件費	114,487,000
会費収入	65,000,000	施設管理費	62,761,000
事業収入	243,706,000	その他の管理費	32,135,000
施設改修協力金	11,906,000	一般事業費	25,188,000
セミナー会費収入	3,500,000	普通セミナー事業費	44,166,000
補助金等収入	8,346,000	学生指導セミナー事業費	9,414,000
寄付金収入	300,000	国際セミナー事業費	3,950,000
雑収入	8,410,000	固定資産取得支出	71,500,000
繰入金収入	5,608,000	繰入金支出	6,110,000
当期収入合計(A)	346,903,000	繰入金支出	10,000,000
前期繰越収支差額	54,192,000	特定預備費	5,000,000
収入合計(B)	401,095,000	当期支出合計(C)	384,711,000
		当期収支差額(A)-(C)	△37,808,000
		次期繰越収支差額(B)-(C)	16,384,000

表5 平成3年度一般会計収支計算書
(平成3年4月1日~平成4年3月31日)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
基本財産運用収入	156,197	人件費	113,957,273
会費収入	63,328,554	施設管理費	65,241,662
事業収入	214,595,965	その他の管理費	29,484,240
施設改修協力金	10,548,750	一般事業費	23,794,110
セミナー会費収入	3,500,442	普通セミナー事業費	37,147,108
補助金等収入	7,704,500	学生指導セミナー事業費	9,763,664
寄付金収入	802,324	国際セミナー事業費	3,721,524
雑収入	12,543,640	固定資産取得支出	21,121,761
繰入金収入	2,688,100	繰入金支出	5,961,246
その他の収入	5,961,246	繰入金支出	
繰入金収入	5,961,246	当期支出合計(C)	310,192,588
当期収入合計(A)	321,829,718	当期収支差額(A)-(C)	11,637,130
前期繰越収支差額	51,559,425	次期繰越収支差額(B)-(C)	63,196,555
収入合計(B)	373,389,143		

高千穂商科大学と桜美林大学に続き
専修大学が協会員校に
会員校は計68校に

第78回理事会・第58回評議員会
'92年4月1日/学士会館(神田)

〔出席者〕

(理事) 中川秀恭、岡宏子、天城勲、小山五郎、佐野博敏、三宅彰、鈴木皇、小岩健介

(評議員) 川原栄峰、伏見康治、井早康正、山本肇、梶原長雄、西川哲治、朝倉孝吉、黒田瑛、竹内正幸(代理・町田篤彦)、古浜庄一(代理・古賀浩二郎)、福田欽一(代理・宿崎和夫)

▽平成3年度事業報告案及び決算報告案に関する件
宿泊利用者が開館以来初めて延べ六万人を超え、事業収入も目標を約二、五〇〇万円上回ったが、一方、ユニット・ハウスの修理など諸施設の管理費で支出増となったほか、多額の費用を要する水源井戸の改修工事等が次年度以降に持ち越された(別掲「教育プログラム白書」「業務白書」及び「収支計算書」参照)。
なお、監事から「平成3年度における会計および業務とも適正に処理されている」旨の監査報告がなされた。



平成4年度第1回理事会・評議員会

(92.6.3 神田・学士会館)

逝去に伴う東海大学理事長松前達郎、国際基督教大学長大口邦雄両氏の新任。

▽会員校加入の件

高千穂商科大学、桜美林大学の両校の協力会員校加入。

▽利用料金の改定に関する件

開館以来26年を経て、諸施設の修理整備に多額の費用を要することもあり、利用料金の改定に踏み切る。宿泊料は一泊につき学生は三〇〇円、他の利用者は四〇〇円の値上げ。ここ9年間据え置かれた食事代も、質量の水準確保と向上のため一日三食で三〇〇円（従来の計一、〇〇〇円が二、三〇〇円に）の値上げとす

る。

委任状による者11理事11名、評議員58名（敬称略・順不同）

◇

中川理事長が議長となり、小岩専務理事から逐次各議案の説明があり、質疑・審議の結果、いずれも可決承認された。

▽評議員人事に関する件

協力会員校の学長交替に伴う東京医科歯科大学長山本肇、成城大学長山田俊雄、お茶の水女子大学長太田次郎、青山学院大学長内藤昭一、埼玉大学長堀川清司、東京学芸大学長蓮見音彦、東京女子大学長山本信、武蔵大学長桜井毅、明治大学長岡野加穂留、筑波大学長江崎玲於奈各氏の新任。加納六郎、宮崎孝一、河野重男、西岡久雄、竹内正幸、関四郎、京極純一、小原広忠、木村礎、阿南功一各氏の退任。また松前重義、渡部保男両氏の

実を上げる計画、さらに、学生が「受ける教育」から「活動する学習」へと自主的にセミナーを運営、OBとしてハウスを支援する計画もあることなどが紹介され、全員拍手のうちに終会となった。

平成3年度
第1回大学教員懇談会企画委員会
'92年3月17日/青学会館

〔出席者〕

蠟山道雄・示村悦二郎・原科幸彦・小池生夫・平木典子・岡村 浩・中田良平・西脇威夫・高橋たまき・建部正義・戸張よし子・安岡高志・吉野輝雄

**国際学生セミナー20回記念
同窓会セミナー開催の
ための準備委員会が発足**

「国際学生セミナー20回記念同窓会セミナー」（仮称）に関する覚書が、同セミナー3回参加の吉原健吾氏から、岡館長に手渡されたのは、2月20日のことであつた。「国際学生セミナーの第20回を記念して、94年1月下旬をめぐりに1泊2日で同窓会セミナーを開催したい。同セミナーの参加者が卒業後に、改めて世代や職種を越えてもう一度交流できる場を作ってほしい。そして少しでも大学セミナー・ハウスの事業の発展に協力したい」という趣旨を、岡館長は時宜にかなうものと評価した。そして早速同セミナーの企画母体である国際プログラム委

〔セミナー・ハウスより〕

岡宏子館長・小岩健介専務理事他1名

〔課題〕

蠟山委員長が議長となり、以下の通り議事が行なわれた。

（1）第28回大学教員懇談会「改正大学設置基準のめざすもの」よりよい大学教育を実現するために」の実施報告

（2）平成3年度FDプログラム小委員会の活動報告

（3）第29回大学教員懇談会の企画については、「改正大学設置基準をめぐる各大学の対応について」（92年9月26～27日）をテーマに開催することになった。

員会や法人理事会に諮り、賛意が得られた。それを受けて、この試みの具体化を目ざして準備委員会が発足した。

国際学生セミナーでは、一テーマを4回のシリーズとして開催していることから、過去3回のシリーズから、それぞれ本間正人・岡村慶子・永野隆行の3氏と吉原氏が委員に選ばれた（後に、鍋田毅・神尾裕の両氏加わる）。

準備委員会は、まず4月24日に岡館長も陪席の上、趣旨の確認と今後の準備の進め方などを協議した。また5月25日の第2回委員会では、同窓会組織発足のためのスケジュールと広報の方策などを協議した。

同セミナーの参加者でこの試みに参加したいという方は、是非ご連絡下さい。（当ハウス企画室・池田まで）

より積極的に受け入れ、「大学を開く」

千人会

92年3月
5月

◆現在会員一、四四九名(実会員数)
(通算入会者一、八四一名)

◆新しく会員となられた方

A 大妻女子大学教授 千羽 喜代子殿
◆会費ありがとうございます。

- 宇野重昭、板垣雄三、内藤博、麻生幸、松井賢夫、西川恭治、豊田陽子、安藤英治、佐藤宗弥、永野賢、谷口汎郎、山澤逸平、宮腰賢、平野由紀子、人見宏、高橋誠、朝倉弘之、早坂泰次郎、寿里茂、松崎義徳、梅村魁、勝見允行、大頭仁、追村純男、一松信、永井道雄、平野鉄太郎、白川和雄、福島重美、今井清一、松尾弘、原一雄、市川邦彦、小原啓義、大西清、寺内礼治郎、土井恵美子、柘植敏治、麻島昭一、斎藤幸一郎、村井美、木田宏、光延明洋、河村フジ子、原芳男、岡村総吾、吉沢四郎、中津攸子、高瀬文志郎、平澤薫、島田治夫、佐藤玉枝、池原義郎、有賀弘、福西基向坊隆、池田義人、村田晴夫、内山正熊、山田辰雄、大河内正陽、佐藤公孝、宍原豊、手塚喬介、丸山眞男、小山五郎、茂木光子、野澤農、森山ヨシ子、望月清司、山本和代、熊坂敦子、柴田泰比古、松澤正夫、中島直忠、萩原稔、小倉芳彦、鴨澤巖、村山松雄、石渡毅、碓井信一、田中喜久昭、矢田俊文、河田喬夫、長谷川至弘、木村尚三郎、佐藤慶幸、西野万里、田中未未、竹林代嘉、勝見允行、小泉仰、加藤六美、関根隆光、村田和巳、藤井弥太郎、伊藤学、牧内勝、関口富佐、絹川正吉、江洲浩美、館逸雄、堤彪、伊藤憲智郎、藤木宏幸、高峯一愚、井上繁、石弘光、海老根宏、林肇、染谷恭次郎、飯田修一、塩田庄兵衛、樋口美智恵、矢野洋四朗、春田素夫、渡利千波、中田良平、室本誠二、久保田浩、山崎誠、木村建一、高木健太郎、松澤通生、丹羽芳雄、井村君江、小島蓉子、堀野定雄、吉利喜美、清水昭次、山之内靖、佐伯彰一、横山勝信、手島修蔵、佐藤和男、桐生富久、伊倉退蔵、加藤秀俊、下出積興、太田正孝、森田桐郎、佐藤経明、向山文雄、鈴木達雄、

平成3年度千人会会計収支計算書

(平成3年4月1日より平成4年3月31日まで)
(単位:円)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
会費収入	3,928,554	印刷製本費	625,210
雑収入	698,454	通信運送料	783,242
		学生指導料	45,530
		国際セミナー補助	5,118,222
		雑費	843,024
			6,283
当期収入合計(A)	4,627,008	当期支出合計(C)	7,421,511
前期繰越収支差額	10,415,177	当期収支差額(A)-(C)	△2,794,503
収入合計(B)	15,042,185	次期繰越収支差額(B)-(C)	7,620,674

阿部弘、滝口俊子、板橋定雄、望月清司、小原清成、玉田啓八、菊地昌典、狩野紀昭、水野弘文、肥前栄一、下森定、富山芳正、椿弘次、後藤捨男、矢澤大二、加藤幹夫、北野弘久、金子六郎、大原栄一、井上宇市、村田勝彦、芳賀徹、加藤晴久、荒井献、長谷川幸男、平野文彦、岡田英和、中島康孝、高柳暁、峰岸純夫、国分久子、伊藤喜栄、奥野忠一、加藤一郎、天城勲、近藤正夫、水谷眞智子、内田祥哉、澤島侑子、吉本昌司、竹内昭夫、仁科雄一郎、奥山典生、今井栄、福島明、佐藤弦、古賀正則、川名明、本明寛、村瀬受、西澤宗英、細谷千博、内田市五郎、徳末愛子、荒井基、徳永勇雄、朝野洋一、井早康正、藤井耕一、児玉昭太郎、長岩寛、大村晴雄、島田淳子、荒川有史。(敬称略)

◆千人会員からのたより
誕生日の祝辞有難うございました。幸にも健康に恵まれ、現職のとき以上に研究に励んでおります。上智大学名誉教授 市川邦彦

◆
昨年七月から日本学術会議会員になりました。温いお配りのおかげを添えて頂きうれしく存じます。冬を越え春を迎えるセミナー・ハウスの風景を想像いたして下さる。土井恵美子

元気で研究に明けられています。六〇歳の記念に学位を取得いたしました。今年こそお訪ねしたいと思っております。
東京家政大学教授 河村フジ子

◆
82歳の生命を与えられ感謝でいっぱいです。不肖に命ぜられたお仕事を終って召天したいと思ひ祈り続けています。大きな夢のセミナー・ハウスの益々の発展を祈ります。
下妻少友幼稚園園長 福西 基

◆
大学設置基準の改善等で益々、大学セミナー・ハウスの存在がまた、活用が重要になって来ましたね。
国立音楽大学助教授 佐藤公孝

◆
定年で大学の職務から解放されて早くも一年、自宅のパソコンで運動による「Patient's Journal」の観察を続けて居ります。
聖心女子大学名誉教授 野澤 薫

◆
「生涯学びの旅路」、大学セミナー・ハウスのための作詩をお目にかけます。旧制高校の歌風に歌っていたら……。(歌詩略)
東京教育大学名誉教授 平澤 薫

◆
パスデーカーがありがとうございました。主人は唯今、ハーバード大学に客員教授として出かけており、代って送ります。
専修大学教授 萩原 稔

◆
鴻鶴の志を守る丘の初桜
東京都立大学名誉教授 高峯一愚

◆
定年後の勤めが中央大で、すぐ間近かになったのに、かえってうかがう機会がへって、残念に思っております。
中央大学教授 佐伯彰一

◆
長年にわたって東大比較文学会の合宿セミナーさせて頂き、有難うございます。小生東大を去って京都に移りましたが、比較文学会のはうはこれからもよろしく。
国際日本文化研究センター教授 芳賀 徹

◆
定年退職後10年、小さな研究室でバイオリンの研究を続けております。
学習院大学名誉教授 近藤正夫

◆
去る3月で長年の教員生活に別れを告げました。与えられた時間で、少しは家事にも心を入れ、ツンドクの山をくずしたいと思ひます。
徳末愛子

◆
春は忘れずに廻って参りますが、復活祭とこのハウスへのささやかな捧げもののおかげとに生きてある幸せを感じます。
電気通信大学教授 井早康正

◆
遠景に都立大を望める御由、おたより有難く拝見いたしました。
東京都立大学名誉教授 大村晴雄

◆
国立音大名誉教授熊谷孝氏が92・5・10永眠しました。文教研を大学セミナー・ハウスに紹介してくれた方です。8月5日の全国集会には、追悼の行事をセミナー講堂で聞くことになりました。よろしくお願い申しあげます。
国立音楽大学教授 荒川有史

寄付金

92年3月
5月

△一般寄付金▽
三、〇〇〇円 C I Cカナダ国際大学

△植樹▽
アメリカはなみずき1株 榊原健殿
あんず2株 東京外国語大学 中嶋嶺雄ゼミナール殿
はなみずき1株 よう92年度新入社員殿
生活協同組合 コープとうき
市光工業株式会社人材開発部教育課殿

みつばつつじ2株 学習院大学法学部政治学科
フレッシュマンセミナー92殿

みつばつつじ1株 株式会社東芝デザインセンター殿

マゲノリア1株 宮沢賢治読書会殿

菓子器一個 茶道教室 紫水会殿

業／務／通／信

92年3・4・5月

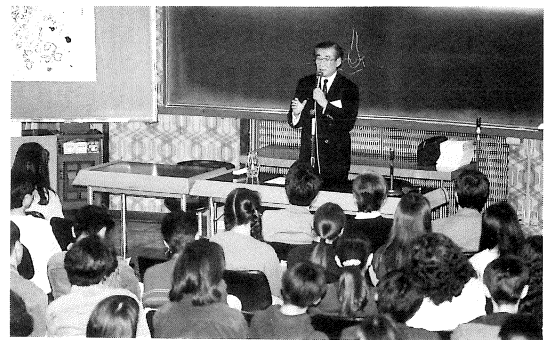
花と新緑の中の合宿研修から

学年末の常連ゼミ、新学年のフレッシュマン合宿——春季3カ月の宿泊利用者は計二万七八四人。1日平均二二六人、宿舎の稼働73%という、春特有の活況ぶりである。その間の合宿研修から、いくつかの話題を拾ってみた。

●ゼミナール25周年の記念樹

穏やかな早春の陽ざしの中、インターナショナル・ロッジ（記念館）の入口に一株の立派なアメリカハナミズキが植えられた。中国、台湾、韓国などからの留学生や駆けつけたOBたちも、次々とシヤベルを手にその根元に土を盛った。東京外国語大学中嶋嶺雄ゼミ「25周年」の記念樹である。昨秋都心で開かれた記念パーティーの席上、同ゼミのOB・OG（卒業生はいま二〇〇名余）、現役ら関係者全員からの贈物として「目録」を頂戴したものが、この日の植樹となった。

このハナミズキ、新緑の頃に紅の花をつける。今後は記念館入口のアーチとなり、同館を訪れるおおぜいの内外のゲストを迎えてくれるだろう。ご自分のゼミ合宿での利用に加え、国際プログラム委員会の委員長として国際学生ゼミナー等の推進にも深く関わられ、またインターナショナル「ロッジ」命名の提唱者でもあられた中嶋嶺雄教授にとって、さまざま



桜美林大学国際学部の新入生オリエンテーションであいさつする大野一男学長——同校の協力会員校としての初利用となった（'92. 4. 4）

まな、深い感慨がこめられた記念植樹であつたに違いない。（わたしたちの合宿（下掲）に一文をお寄せいただいた。

●新入生合宿で一人を越える

新入生オリエンテーション合宿のピークはやはり4・5両月で、ほとんど連日学部または学科の大型合宿が繰り返された。実施状況は別表（14頁）のとおりで計59グループ（25校）、延べ一万九七五人（うち教職員は七二八人、上級生は七五三人）。4・5両月の新入生合宿で一人を越えたのは初めてである。これは両月の総宿泊利用者の71%に相当する。

今季初めて実施されたのは①東京工業大学工業化学科②学習院大学法学部政治学科③中央大学独文専攻④東京学芸大学哲学研究室の四グループであつた。短期日のオリエンテーション合宿を効果あら

わたしたちの合宿

中嶋ゼミ二十五周年

記念の植樹とともに

東京外国語大学教授 中嶋 嶺雄

私が最初に大学ゼミナー・ハウスを訪れたのは、たしか一九七二年の第二回国際学生ゼミナーの時であつたから、もう二十年も前になる。この間には、国際学生ゼミナーや国際プログラム委員会のゼミナー、運営委員会の会合などしばしばゼミナー・ハウスを訪れ



記念館の入口に植えたハナミズキを囲んで——中央が中嶋嶺雄教授と（その右）岡宏子館長（'92. 3. 8）

ているが、なんといつても私の国際関係論ゼミナーの合宿で来る回数が多い。

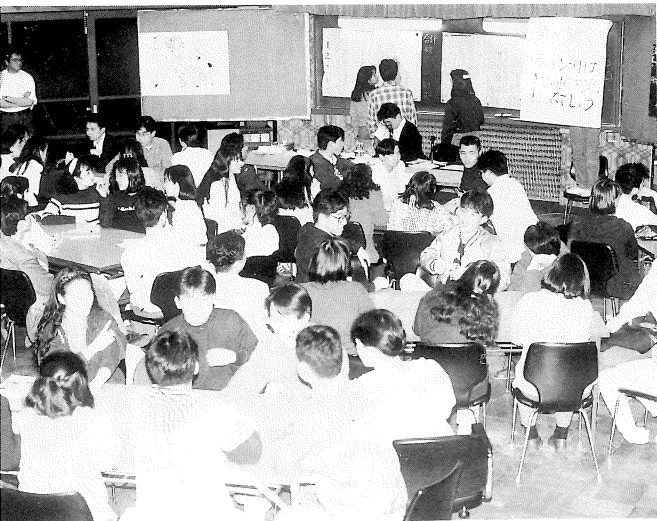
従来から私のゼミでは、夏合宿は信州で二泊三日ということになっているけれど、春の卒論・修論発表会を兼ねた合宿は、大学ゼミナー・ハウスで一泊二日というのが恒例になっている。それぞれ卒論・修論を要約して、各自の専攻語で発表するのが私のゼミの特色だといえようが、この三月七日八日にも、インターナショナル・ロッジでそれが行われ、三・四年生、院生、OB、OGを含め約四十名が参加した。うち十名は中国、台湾、韓国などからの留学生であつた。私のゼミでは、この春合宿が実際の「卒業式」になつていて、卒論や修論への最終コメントも、この場で一人一人にたいして行うにしている。

三月八日の朝は、日本の国際貢献に関する三年生諸君の熱っぽいディベートが終わつた午前十一時半に、インターナショナル・ロッジ正面へ「中嶋ゼミ二十五周年記念」の植樹をさせていただいた。

ゼミナー・ハウスの丘に來られた方なら誰もが気づくように、そこには沢山の樹木が寄進されている。ゼミナー・ハウスに永くお世話になつた者として、私も植樹させていた。こうとはかねてから思つてはいたものの、むやみに申し出ておかせつてご迷惑になるので、これまでその機会を待っていた。しかし、木の種類をアメリカハナミズキにしようというところは、随分前から決まっていた。私が一九六七年春に最初に訪米したウィリアムスバーグのロッジ周辺に訪米したウィリアムスバーグが実に美しかったからであり、インターナショナル・ロッジというヒントもそこにあつたからである。

たまたまゼミの二十五周年パーティーが昨年十一月二十九日に国際文化会館で開かれ、飯田宗一郎・名誉館長にもご祝辞をいただいたのだが、そこで綿引二郎業務課長に「目録」をお渡し、今回の記念植樹になつたのであつた。

当日は日本一のハナミズキ専門という大宮の植木屋さんに来ていただいて、立派な木を植えることが出来た。折りよく和やかな春の日差しの中、岡宏子館長もわざわざお見え下さり、私の年来の「夢」がゼミ生諸君の協力を実現できたことは幸せであつた。



「ライン河はどこを流れてくるでしょう」
 ——上級生が用意したクイズゲームを楽しむ中央大学
 独文専攻の新生たち (92. 4. 11)

しめるために、それぞれにさまざまな工夫と努力が年々加えられている。
 ●さまざまな工夫と努力を加える
 4月早々、あえて入学式前の実施を選ばれたのは①東京薬科大学新入生歓迎キャンプ②立教大学フランス文学科③桜美林大学国際学部。②の場合は合宿終了の朝、全員バスでこの丘から入学式に向かった。魅力あるプログラム作りのため、左記のようなイベントも組み込まれている。上級生の参加と協力が一層の効果をもたらしていることも伺えた。①卒業生による講演、体験談②教師・上級生によるパネル討議③ハウスの地形を活かしてのオリエンテーリング、キャンプファイヤーなどの野外活動④往路・帰路に組んだ学科関連施設の見学や高尾山等へのハイキング⑤上級生が用意したクイズゲームを楽しむながらの学科ガイダンス（上掲写

真。

●外国人留学生のオリエンテーション

新緑の美しい4月下旬の週末、今年も慶応大学外国人留学生オリエンテーション・キャンプが開かれた。このキャンプは同大学の国際センターが主催するもので、79年の第1回以来今年で13回も続けられている。外国人留学生は入学早々さまざまな問題に直面する。新しい環境への適応は容易なことではない。彼らの大学生生活の出発を少しでも円滑なものにしようというのがこのキャンプのねらいである。キャンプでは留学生同士、そして日本人学生や教職員との共同の生活体験を通しての交わりに力点がおかれる。

今春の参加者は、七ヶ国からの留学生42名。これに各学部の学習指導に当たる諸先生、国際センターのスタッフ、2年以上以上の先輩留学生、さらに留学生の学園生活を支援するためのグループとして従来から存在する通称KOSMICの日本人学生たち、総勢101名であった。全員での集会、各学部別に分かれての懇談のほか、懇親会・ゲーム、野外でのスポーツ、そして当ハウスの提供による遠来荘での茶道体験など——楽しい1泊2日のキャンプの中で、新入留学生たちは一挙に多くの他の留学生や日本人学生、そして諸先生とも知り合うことができた。これは彼らの今後の大学生活にとって大きなプラスであろう。3人の参加留学生から寄せられた感想文をご紹介します（下掲〈私の国際交流〉）。

私の国際交流

慶応義塾大学・国際センター主催の外国人留学生オリエンテーション・キャンプに参加して

お互い異文化を理解して

商学部 胡 湘（中国）

私は中国からの学生です。本国で日本語通訳の仕事をしてきました。今、日本でまた大学生活を体験して、一生の中ですごく貴重なチャンスだと思っています。
 慶応義塾大学で勉強して、日本および世界各国からの学生と交流して、異国の風俗、習慣に触れ、本国で接触できないことが了解できて、とても有意義ですし、また国際的な感覚の育成に非常に役に立つのです。



新緑の「出会いの丘」で——7ヶ国からの留学生42名に日本人学生と教職員、計101名が勢ぞろいした (92. 4. 26)

この前、留学生のオリエンテーションの時、大学、セミナー・ハウスで、先生たち、各国からの学生たちと一緒に、綺麗な緑の中で、清々しい空気を吸って、お互いによく話し合い、会食したり、スポーツしたりして、友情を深めました。お互いに違った国から来て、文化が違うけど、でもこういうチャンスを利用して、お互いの国を理解し、お互いの文化を勉強し、視野も広めました。とてもいい思い出になりました。

九州なまりと間違われても

文学部 Y・T（マレーシア）

慶応大学に入ってから、日本語学校と違って、外国人ばかりでなく、日本人とのつきあいがこれから始まるのではないかとつくづく感じています。日本語学校で一所懸命に標準語を習い、イントネーションまで練習したりしていたけど、大学に入って、色々な人と話し合ったりしたあと、日本人に九州から来たのかと聞かれた覚えがあります。最初がっかりしたけど、よく考えてみると、なまりはどいうであろうと、心を通じさせたいのではないかと思っています。四月の合宿でいっぱい友達ができ、おかげで楽しい大学生活を送っています。

本来の自分を見せ合って

経済学部 エイ・A・ミン（ミャンマー）

日本に来て、よく「国際交流」という言葉を耳にするが、私はほとんど意識していませんでした。日本語学校で勉強していた時も、国籍を問わず、年齢を問わず自然に友達になりました。中には、自分の両親と同じ年齢の人もいました。
 大学に入って、まわりに日本人が多くなった後でも、私はお互いの地位を気にしないで友達を増やしてきました。
 私は、個人的に本来の自分を見せ合えない「国際交流」が成り立たないのではないかと思っています。

平成4年4月・5月
新入生オリエンテーション合宿実施状況



学習院大学政治学科が初のフレッシュマン・セミナー
——教師と上級生が自らの体験や考え方を語った(92.4.10)

フレッシュマン合宿に想う

参加して非常に良かった、と思う。いろいろなところから、いろいろな個性を持った人達が集まり、いろいろな話をした。始めは「どこから来たの」だったが、今では、深く語り合う友達になっている。このような機会を与えてくれた方々と、この時友達となった人達に「ありがとう」と言いたい気持ちです。感謝をしています。

(学習院大学政治学科 山田貴信)

我が人生において、このセミナーは、多大なる影響を与え、かつ友情の美しさを痛切に感じさせられたものでありました。この大なる自然の中で、偉大なる教授たちの講義を開き、また教授たちと人生について語り合ったことは、一生自分の心に焼き付き、はなれることはないことでしよう。それに加え、よき友だちと寝食を共にしたこと、人は支え合って生きていくことを知り、より友情のすばらしさを実感させられました。

(東京学芸大学・自然環境科学 石川和宏)

セミナー・ハウスで一番印象深かったことは、(恥ずかしながら)食事がおいしかった事です。遅れて着いた私に、嫌な顔一つせずおいしい食事を出して下さった食堂の方々に、本当に感謝しております。

また、部屋は簡素ながらもベッドメイキングが行き届いており、快適な一夜を過ごせました。たった一晩泊まりで大変嬉しいです。機会があればまた利用させていただきたいと思っています。

(明治学院大学第II部社会学科 鳴海 聖)

星空の下で、就寝の支度をしながらふと思つた——星を観ながら歯を磨くなんて何カ月ぶりだろう——そう思うと、心に安堵感が広がった。これには忙しい学生生活では語り合えない人達と語り合えた事に対する満足感も含まれていた。

思えば、毎日刻みで生活している私にとって、意図的に星をみたり、人と腰をすえて話す機会はほとんどなかった。だからこのセミナーは自然や人の心に触れられた素晴らしいものであった。

(東京都立立川短大食物学科 大林夏樹)

セミナー・ハウスは、多くの自然に囲まれていて、交流を深めるにはよい場所だと思います。朝は空気がおいしくて、鳥がいないたりして(実際に起きたのはチャイムだけ)ちょっと素敵な朝でした。学校では見られない先生方の意外な一面も見られておもしろかった。立食パーティでは(私はこういうことは初めてだったので、ちょっとドキドキしていた)食べたかったものがなくなってしまうていたりして、ちょっと悔しい思いもしました。私は参加してよかったと思っています。

(東京都立立川短大食物栄養学科 右近実枝)

新入生、いや、上級生、先生方にとってもこのような場があつて利用できる事は、とても重要なことであると感じている。まだ知り合つたばかりの私達にとって、夜寝るのを惜しんでの語り合いは、お互い相手を理解する一番の方法と考える。したがって分科会も、先生や学生がどのような考えをもっているのかを知り、これからの学生生活の不安を少しでも解消してくれる場となつた。

(東京都立立川短大家政学科 加賀屋美津子)

学校名・学科名	参加人数(人)		
●4月(28グループ)			
東京薬科大学(新入生歓迎キャンプ)	*219		<112>
立教大学・フランス文学科	93	(9)	<3>
桜美林大学・国際学部	304	(17)	<31>
東京純心女子短期大学・音楽、美術、英語科	270	(27)	<2>
共栄学園短期大学・生活学科	280	(27)	
共栄学園短期大学・英語学科	201	(24)	
東京工芸大学・工業化学科	149	(20)	<6>
学習院大学・政治学科	309	(12)	<43>
学習院大学・学生相談所	37	(3)	<14>
中央大学・独文専攻	105	(8)	<18>
東京都立大学・機械工学科	52	(9)	<2>
東京会計法律学園	*350	(9)	
東京学芸大学・国際文化教育課程	139	(24)	<13>
東京職業訓練短期大学校	84	(12)	
東京都立大学・精密機械学科	60	(7)	<6>
日本女子大学・社会福祉学科	138	(13)	
東京都立商科短期大学・経営学科II部	116	(15)	<33>
中央大学・心理学コース	86	(2)	<7>
東京会計法律学園	*298	(9)	
東京都立医療技術短期大学	301	(49)	
中央大学・教育学コース	67	(7)	<12>
恵泉女学園大学・人文学部	247	(28)	
十文字学園女子短期大学・生活学専攻	277	(10)	<24>
慶応義塾大学・国際センター(留学生)	100	(14)	<27>
立教大学・ドイツ文学科	78	(8)	
東海大学・西洋史学科	58	(5)	<4>
大妻女子大学・児童学科	129	(14)	
武蔵工業大学・電子通信工学科	192	(21)	
●5月(31グループ)			
東京会計法律学園	*317	(7)	
武蔵野外語専門学校	32	(9)	
東京会計法律学園	*256	(4)	
津田塾大学・英文学科	283	(15)	<14>
東京学芸大学・生物学教室	35	(4)	<3>
東京学芸大学・地学教室	34	(4)	<4>
東京学芸大学・化学教室	34	(4)	<3>
東京学芸大学・物理学教室	24	(3)	<3>
東京学芸大学・理科教育学教室	21	(2)	<2>
東京都立商科短期大学・商学科II部	136	(10)	<35>
東京薬科大学・薬学部	214	(2)	<6>
東京都立立川短期大学・生活、食物栄養学科	150	(26)	<8>
東京都立商科短期大学・商学科	310	(21)	<45>
東京薬科大学・薬学部	285	(3)	<8>
東京都立科学技術大学・機械システム工学科	58	(6)	
東京学芸大学・心理臨床専攻	39	(3)	<2>
明治学院大学・第II部社会学科	101	(13)	<10>
東京学芸大学・自然環境科学教室	55	(9)	<5>
東京学芸大学・教育情報科学教室	45	(4)	<3>
東京学芸大学・文化財科学教室	25	(2)	<2>
東京学芸大学・哲学研究室	8	(1)	
東京電機大学・情報科学科	164	(12)	<35>
文教大学女子短期大学部・英語英文科	*276	(25)	
東京都立大学・物理学科	62	(7)	<14>
東京都立大学・化学科	82	(5)	<40>
東京学芸大学・数学教室	132	(8)	<6>
東京会計法律学園	*275	(4)	
白梅学園短期大学・保育科	*261	(21)	
東京都立大学・電気、電子情報学科	81	(13)	<4>
東京都立大学・数学科	65	(12)	<32>
日本女子大学・教育学科	138	(13)	
計 59グループ(25校)	8,737	(675)	<641>

(注)参加者数の()内は教職員、< >内は上級生でともに内数。*は2泊、他は1泊、実施順。なお、参加者の延べ人数は、10,975(718)<753>である。

予 告

●第160回大学共同セミナー

主 題：身体運用の妙を探る
——日本の動法の世界——
期 日：1992年10月24日～25日(土～日)
定 員：100名

◆主題講演
身体の高テク
——日本の伝統が育んだ武術の体捌——
武術稽古研究会松聲館主宰 甲野善紀氏

◆シンポジウム
I. 動法・内観・感応の文化
社整体協会整体法研究所所長 野口裕之氏
II. 日本人の生活技術を考える
工業デザイナー 秋岡芳夫氏

<特別ゲスト>
早稲田大学人間科学部教授 中村桂子氏

<運営委員>
東京経済大学経済学部教授 桜井哲夫氏
武術稽古研究会松聲館主宰 甲野善紀氏

●第19回国際学生セミナー

主 題：地球時代の生き方をもとめて
——国境は越えられるか——
期 日：1992年11月13日～15日(金～日)
定 員：80名
申込締切：10月30日(金)

◆ゲスト講演
地域から地球へ——内発的發展論のすすめ——
上智大学名誉教授 鶴見和子氏

◆セクション演習
A. EC 統合——見える国境・見えない国境——
津田塾大学学芸学部教授 梶田孝道氏
慶応義塾大学法学部教授 田中俊郎氏

B. 東欧・ソ連におけるナショナリズムと
連邦国家の解体
東京大学教養学部助教授 中井和夫氏
東京大学教養学部助教授 柴 宜弘氏

C. 現代ラテンアメリカにおける統合と分裂
アジア経済研究所主任調査研究員 暹野井茂雄氏
上智大学イベロアメリカ研究所長
グスタボ・アンドラーデ氏

D. 個人にとっての国家・国籍・国境
静岡県立大学国際関係学部教授 田中恭子氏
NHK 国際局チーフ・ディレクター 田辺寿夫氏

<運営委員>
一橋大学社会学部教授 古賀正則氏
上智大学外国語学部教授 今井圭子氏
津田塾大学学芸学部教授 梶田孝道氏
東京大学教養学部助教授 中井和夫氏

◆問い合わせ・募集要項の請求先＝企画室
☎0426-76-8532 (直通) 8511 (代表)

／安川電機／市光工業／共栄エンジ
ニアリング／日商岩井／日本石油化
学／富士電機／調布ハウジング／コ
ニカ

■5月93グループ、延七、六六四人

法政大学会計学研究会
立教大学ミッチェル館

東京理科大学教授 沖塩莊一郎
中央大学白門会

学習院大学シェイクスピア・ドラ
マ・ソサエティ

一橋大学国際部
芝浦工業大学電子計算機研究会

学習院大学教授 齊藤 孝
駒沢大学助教授* 谷敷 正光

日本大学教授 北野 弘久
津田塾大学英文学科フレッシュマ
ン・キャンプ

東京学芸大学各教室新入生合宿研修
生物学教室

地学教室
化学教室

物理学教室

理科教育科学教室
自然環境科学教室
教育情報科学教室
文化財科学教室
数学教室

明治学院大学教授* 秋山 智久
東京都立商科短期大学商学科II部新
入生歓迎オリエンテーション

立教大学教授 北岡 伸一
電気通信大学助教授 高澤 嘉光

法政大学教授 下斗米伸夫
東京薬科大学薬学部フレッシュマン
キャンプ*

法政大学教授 陣内 秀信
東京都立立川短期大学生活・食物栄
養学科新入生歓迎セミナー

東京都立商科短期大学商学科新入生
歓迎オリエンテーション

東京都立科学技術大学機械システム
工学科新入生オリエンテーション

慶応義塾大学教授 笠井 昭次
芝浦工業大学教授 高橋 清

東京学芸大学心理臨床専攻新入生オ
リエンテーション

明治学院大学第II部社会学科フレッ
シュマンキャンプ
東京学芸大学哲学研究室新入生合宿
駒沢大学教授 大久保治男
桜美林大学ヴォランティア研究合宿
東京理科大学狩野・高橋ゼミ

駒沢大学教授 瀬戸岡 紘
桜美林大学体育文化団体連合会

東京電機大学情報科学科新入生研修
東京理科大学地震工学セミナー

中央大学教授 田中 拓男
文教大学女子短期大学部英語英文科
フレッシュメンセミナー

武蔵工業大学助教授 安田 忠郎
東京都立大学物理学科新入生オリエ
ンテーション

東京都立大学化学科新入生オリエン
テーション

白梅学園短期大学保育科新入生オリ
エンテーション

東京学芸大学教授 原 聡介
桜美林大学教授 大木 昭男

横浜国立大学教授 清水 久二
東京都立大学電気・電子情報学科新

入生ガイダンス
日本女子大学教育学科新入生オリエ
ンテーション
中央大学教授 三和 一博
中央大学教授 高窪 利一
中央大学カールトン大学短期留学
東京都立大学数学科新入生オリエン
テーション

東京会計法律学園就職合宿*
武蔵野外語専門学校新入生オリエン
テーション

立正大学講師 植村 貴裕
東京商科学院専門学校情報経理学科
コミュニケーション合宿*
東京造形大学教授 星野 隆三

阿佐ヶ谷美術専門学校
都内研究会
草加福音自由教会
ルター研究会

日本聖公会横浜教区
運動学習研究会
チャロドロウ読書会
日本コトバの会

●館長室から●

からだとことば研究所
アマウェイ21クラブ/CSK*/日
本POP広告協会/ウチダユニコム
/ワコール/東芝デザインセンター
/ヘキストジャパン/トヨタ西東京
カローラ

いろいろは坂に揺れる薄の穂、小路に
こぼれる萩の花に、「やっぱり、四
季はなくならなかつた」の妙な安堵
を覚えながら、この編集を終えよう
としています。それほど長く暑い夏
でしたが、その秋が今度は駆け足で
逃げていきそうな気配を感じます。
季節の移り変わりにつれ、ご利用
の方々に大きな動きがみられま
す。春の新入生集団の大型の賑わい
が終わる頃から、教授方の個人ゼミ
が目立ってきます。「五日間が一期
分位に当たった」と、ある先生が洩
らされたように、密度の濃い成果が、
それぞれの形であげられて。

常連の語学研修や各種の国際交流
もこの季節の特徴、その間を縫うよ
うに、学生とは一味違う熱気あふれ
る社会人研修と、顔ぶれは多彩とな
ります。表紙は、この社会人のユニ
クな研修ぶりの一コマです。

大学、そして教員の魅力開発に取
り組む大学教員懇談会、FDプログ
ラム小委員会は、いよいよ具体的方
法を求めている研修の段階に入り、一
段と活性化、その大学教員研修の活
動ぶりを、その折の有馬朗人先生の
講演、示村悦二郎委員長の講義(抄
録ながら)に、御くみ取りいただき
たいと思います。

このような大学、教授、学生のセ
ミナー・ハウスでの集いに接してい
ると、日本の大学も何かといわれる
筋合いはないように思えてくるので
すが、これが大学全体の何%なのか
を考えますと……?でしよう。

(岡)